

書物と長崎をこよなく愛した
名物教授、武藤 長蔵。
彼が生涯をかけて収集した
蔵書に秘められた思いとは…。



CHOHO
01

武藤文庫

文 柴多一雄 (経済学部教授担当科目「日本経済史」)
附属図書館経済学部分館長

武藤文庫は、長崎大学経済学部の前身・長崎高等商業学校の教授を長年勤めた武藤長蔵博士が収集された蔵書です。

武藤博士が亡くなられたあと、長崎高等商業学校の同窓会・けいりんかい 瓊林会がご遺族から譲り受け、昭和21(1946)年の創立40周年記念式典に際して、長崎経済専門学校(長崎高等商業学校の後身、経済学部の前身)に寄贈されました。



柴多教授と武藤博士のレリーフ。
後ろの建物が武藤文庫がある附属図書館経済学部分館。

高等商業教育に尽力した 武藤博士

武藤博士は明治十四（一八八一）年六月に愛知県津島市で生まれました。名古屋商業学校から東京高等商業学校現一橋大学）に入学し、明治三十八年七月に卒業したのち、上海にあった東亜同文書院を経て、明治四十年一月、その二年前に設立されたばかりの長崎高等商業学校の教授に就任しました。そして昭和十一（一九三六）年十月に退官した後も昭和十七年六月に六十一歳で亡くなるまで、名譽教授として教壇に立ち一貫して高等商業教育に力を尽されました。

経済学部の前身「長崎高等商業高校」の碑。
武藤博士はここで30有余年にわたり学生たちの教育指導と自らの研究に専念した。



脱線講義が学生たちに 教えた大切なこと

学校では経済学史、鉄道論、銀行論、植民政策、交通論などの講義を担当しましたが、講義のときはいつも数十冊の洋書を風呂敷に包んで教室に持ち込み、終業の鐘が鳴っても時間が過ぎたのを惜しむように話を続けたといえます。博士の脱線講義は有名で、学生たちはときに文学や芸術にまで及ぶその講義から世界や地元長崎のことを学び、さらには人生について知りました。博士の時流に流されないヒューマンズは学生の心を深く打ち、大きな感銘を与えました。そして昭和五十年の創立七十周年の記念式典には同窓会員の手によって経済学部の図書館前に武藤博士の顕彰レリーフが建立されました。

古賀十一郎らと共に 「長崎学」の三羽鳥と 称される

博士の専門は鉄道交通、経済学史、日本と海外との交通史で、退官後の昭和十四年に『日英交通史之研究』に対し、慶應義塾大学から経済学博士の学位を受

けています。博士は経済学者でしたが、その興味は経済学を大きく超え、歴史学、人文諸学全領域に及んでいました。これらの研究はいずれも文献史的研究で、関係史料文献はすべて集めるといって書誌学的研究を根幹として進められました。

また、武藤博士の研究には、シーボルト、ケンペル、ツンベルグをはじめ長崎に関係する研究が多くあり、『長崎ぶらぶら節』で有名になつた郷土史家の古賀十一郎、初

代県立図書館長であつた永山時英と共に「長崎学」の三羽鳥と称されました。

国境を越えて

多彩な交流を持つ社交家

武藤博士は国内外に広く交流を持つ国際的社交家でした。明治四十四（一九一一年）九月から三年半にわたつて、アメリカ・イギリス・ドイツに留学し、経済学、



右から永見徳太郎、武藤長蔵、芥川龍之介、菊池寛。

商業学などを学びましたが、大正十二（一九二四）年にはオランダ国王から、同十五年にはオウエーテン国王から、昭和十二（一九二七）年にはドイツ政府から勲章を授けられています。

国内では経済学者で慶應義塾塾長をつとめた小泉信三とは、ドイツ留学中にベルリン大学で会って以来、数十年にわたる交流がありました。小泉は博士が亡くなったときは、篤学者歌学者武藤長蔵博士」と題する追悼文を『三田文学』に寄せています。

芥川龍之介が菊池寛とともに初めて長崎を訪れたときには、博士は長崎を案内してまわり、芥川が東京に帰ったあとは多くの本を送って、日記に「長崎の武藤長蔵、盛んに本を送って人を悩ます」となると書かれています。

歌人・斎藤茂吉とも親交を深めて

なかでも、斎藤茂吉との交流はとくに親密なものでありました。斎藤茂吉は、大正六（一九一七）年十二月、三十五歳のときに長崎医学専門学校教授として長崎に赴任しました。茂吉は博士より一歳年下で年齢も近く、二人とも書物に強

い関心を持っていたこともあって、茂吉が留学のため長崎を離れるまでの三年半、二人は親しく行き来しました。留学から帰った茂吉は東京へ戻り、病院経営のかわらぬ歌人としての名声をさらに高めていきましたが、博士との交流はその後も続き、博士が亡くなったときには「かなしみて 君を偲べば 長崎の 海の潮うしほの 鳴りて聞こゆる」という挽歌を捧げています。



武藤博士がたいへん親しかったといふ斎藤茂吉の居宅跡（長崎市上町付近）。

《変わり者》らしい「コトク」な逸話の数々

一方、武藤博士は大変な変わり者としても有名でした。たとえば、長崎で博士と会った研究者が、長崎を離れるときに「いま一度会いたいですから」と再三電話をもらったのですが、どうしても都合がつかずに駅

に向かったところ、博士は駅まで厚い洋書を何冊も持って来て、発車直前まで話していたといえます。

また、ある宴会でいつものように洋書を宴席においていた博士が、ほんやり待っていた芸者に「君、退屈ならこの本を読みなさい」といきなりドイツ語の本を取り出したりしました。

さらにはある日、調査旅行に行った土地の小学校に招かれて、講堂で全校生徒に話をする事になりましたが話し始めたのがアダム・スミスの『国富論』の初版本の考証の話で、生徒たちが退屈して居眠りをしたり、つかみ合いが始まったりしても、かまうことなく二時間話し続けた

といえます。

ところで、長崎は幕末や対外交渉関係資料の宝庫でした。博士はこれらの資料が散逸し、消滅することを恐れ、古書店などで発見したときは支払いのことなど考えず、握って離しませんでした。このため店の主人は、支払いがいつされるかわからないので、博士の顔を見ると良いものは見えないと「さうじまい」込んだといえます。このような話が数え切れないほど残っています。そのため、博士は変人とか奇人と言われたのですが、これらのエピソードはすべて本にまつわるもので、博士の学問に対する情熱と書物に対する深い愛情とから来るものでした。

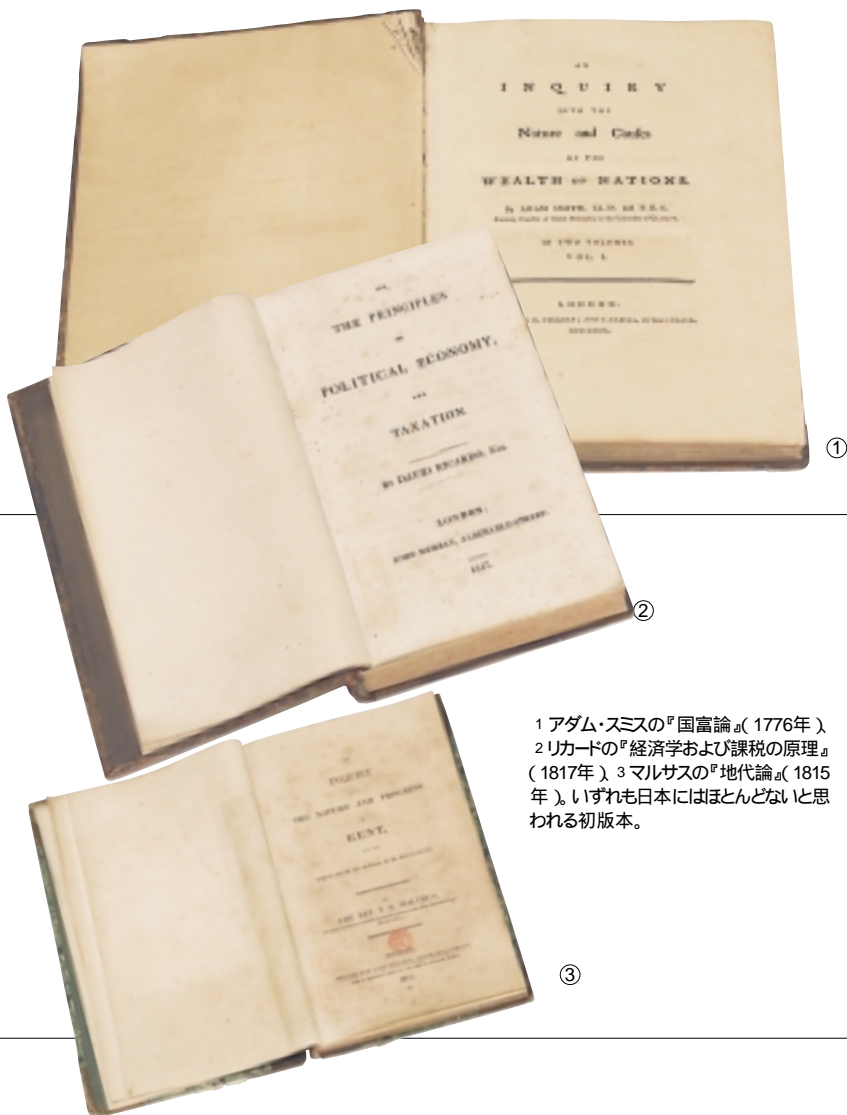
両手に書物を抱えて歩く武藤博士。もっとも彼らしい姿かもしれない。



幅広いジャンルの名著が揃った蔵書類

博士が残した和洋図書や雑誌、小冊子類は約一万冊、それに各種の資料が約二百点ほどあります。その内容は、経済学関係の古典的書物や対外交渉関係の書物を中心に広範囲な学問分野にわたっています。

経済学関係の書物としては、例の『ア



1 アダム・スミスの『国富論』(1776年)、
2 リカードの『経済学および課税の原理』
(1817年)、3 マルサスの『地代論』(1815
年)。いずれも日本にはほとんどないと思
われる初版本。

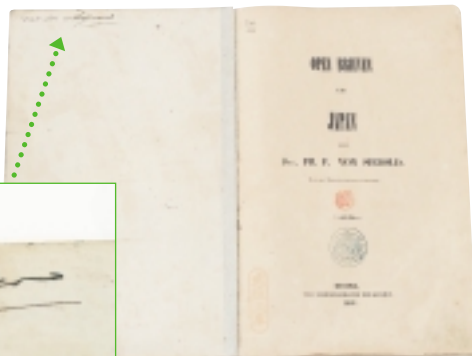
ム・スミスの『国富論』(一七七六年初版本)

やマルサスの『地代論』(一八一五年初版
本)、リカードの『経済学および課税の原
理』(一八一七年初版本)など多くの洋
書があります。

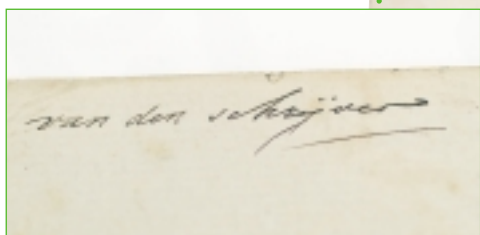
対外交渉や長崎に関係するものとして
は、二六五年にローマで刊行されたロドリ
グスの『日本通信 一六〇九—一六一〇』
などがあります。ロドリグスはイエズス会
の宣教師で、この本は日本での布教と『ロ

ジオ(神学校)の状況を本国に報告した
ものです。

また一八六一年に出島の印刷所で印刷
されたシーボルトの『日本よりの公開状』
は、シーボルトが日本の貨幣、海軍伝習校
田門外の変などについて本国の友人に書
き送ったもので、武蔵文庫所蔵のこの本は
表紙裏にシーボルトの自筆の署名がある
大変珍しいものです。



シーボルトが本国の友人宛に当時の日本
の状況について書いて送った書簡、『日
本よりの公開状』。出島で印刷され、し
かも自筆署名入りの貴重なもの。



出島の時代の貴重な 絵画や陶器も収集

武蔵文庫には図書だけでなく、絵画な
どの資料も多く含まれています。絵画に
は、シーボルトが開いた鳴滝塾の様子を描
いた『鳴滝塾舎之図』やシーボルトのお抱
え絵師といわれた川原慶賀が描いた『長
崎出島之図』、それに松井慶仲が描いた
絵にオランダ通詞・吉雄権之介がオランダ
語の贅を入れた『オランダ人夫妻相愛之
図』などがあります。

また、中国の清の時代に広東にあつた
欧米商館を描いたガラス絵、ガラスの裏面
に絵を描き、その上にわら紙を貼って表
面から見るようにしたもの(『広東十三
行図』)やオランダ東インド会社の略章が
入った『OCCマーク入染付平鉢』なども
あります。

意外な蔵書から 垣間見える 研究への熱意

このほか、武蔵文庫には一見すると武
蔵博士の学問とは直接関係ないように
見える図書も含まれています。たとえば
『The diseases of the ear』(耳の病状)など



「鳴滝塾舎之図」成瀬石痴 画
シーボルトの鳴滝塾の美景を伝える絵はこれしか残されていないという。



「オランダ人夫妻相愛之図」松井慶仲 画
絵にオランダ語の賛を入れたのはオランダ通詞・吉雄権之介。



「長崎出島之図」川原慶賀 画
シーボルトのお抱え絵師だった慶賀の代表的な絵のひとつ。

う本は純粹の医学書ですがこの本の著者である『セプト・トインベント』は博士が心から尊敬し、しばしばその評伝を書いた歴史家アーノルド・トインベントの父親であるためにこの本を入手したのだということです。

また、『古朽木』という安永九(一七八〇)年に刊行された江戸時代の黄表紙大人向けの絵入り小説)があります。これはこの本に出ている『銀行』という一語を確かめるために購入されたもので、この博士は『銀行』という語の由来を必死で調べていました。「余はこの稿を草するにあたり身西(西のほく)の僻地において参考書の貧弱なるを悲しむの情に堪えず」とはその成果を発表した論文にみえる文ですが、資料の乏しい長崎で研究を続けなければならないという悲痛な叫びが聞かれます。

博士があらゆる犠牲を払い、学校の研究室や自宅に置く場所がなくなるほどの内外の図書や資料を所蔵することになったのはこのような恵まれない条件のなかで研究を続けていくにはどうしても自分が必要資料を手に入れなければならないという強い思いがあった

からでした。

武藤博士の学問と一体化する武藤文庫

博士はいつも学者の業績を評価するときはその人が発表した著書や論文だけでなく、その人が収集した文書資料もあわせて評価しなければならぬと語っていたといえます。武藤文庫はその一点一点の図書や資料が貴重であるのはもちろんですがそれ以上に文庫全体として武藤博士の学問と一体化したものと見てこそ、その価値がよくわかるのです。

武藤文庫には武藤博士が愛した長崎高商と、長崎という町そして書物への愛情がいっぱい詰まっているのです。



所在地 長崎大学附属図書館
経済学部分館片淵キャンパス